

第89回講演大会の「一般講演の運営」に関するアンケートの結果報告

本会編集委員会講演大会分科会では、春秋の講演大会がよりよく運営されるよう広く会員のご意見を伺い種々検討を重ねておりますが、その一環として今春（第89回）の講演大会で、限られた時間で行なわれる講演と討論の内容を充実したものとするため、次のように講演運営方法を変更実施し、講演の内容に応じて座長の裁量によつて次のいずれかの方法で運営していただきました。

- A. 従来の方法（講演 15 分、討論 5 分）
- B. 従来の方法に準ずるが、討論時間は 5 分に限らず、各講演について座長が決める。
- C. 数件をまとめて講演し、討論は総合して行なう。
- D. Bの方法で行なつた後、更に補足的に総合した討論を行なう。

これは本会として初めての試みでありますので、新しい運営方法に対し大会参加各位のご意見ご感想を伺うため、座長、講演者及び一般聴講者の方々へそれぞれにアンケートいたしました。その回答結果を次に報告いたします。

1. アンケート内容（該当項目に○を付けてもらう）

イ. 上記運営方法（A～D）のいずれで運営されましたか。

A. B. C. D.

ロ. 従来（A）の方がよい。

- 1) 講演時間がはつきりする。 2) 他の講演を聞きやすい（自分の講演時間以外は他の会場へ行ける）。
- 3) 講演と討論がうまくいく。

ハ. 新しい方法がよい（B. C. D）

- 1) 効果的な討論が行なえる。 2) 講演と討論の時間的な運用がうまくいく。

ニ. 聴講者の立場からは、A, B, C, Dの内どの方法を望まれますか。

ホ. その他意見があればご記入下さい。

2. アンケート回収数

- 1) 座 長：70（約 71%）
- 2) 講演者：114（約 33%）
- 3) 聴講者：198（約 25%）

3. 新しい方式の支持率

参加者の区別	座 長	講 演 者	聴 講 者
体験された運営方式			
従来の方式のみ	14/28 (50%)	16/76 (21%)	10/53 (19%)
従来の方式と新しい方式			67/97 (69%)
新しい方式のみ	41/42 (98%)	33/38 (87%)	44/48 (92%)
総 括	55/70 (79%)	49/114 (44%)	115/198 (58%)

上表から (1) 新方式は約 60% (42/70) 実施された。

(2) 新方式を体験しなかった人は従来方式を支持している。

(3) 新方式のみを体験した人は（当然前回までの経験から従来方式と比較されたと思うが）新方式を強く支持している。

(4) 両方の形式を体験した人（聴講者のみ）は新方式を望む人が多い。

4. 聴講者の回答の解析（聴講者のみがすべての運営方式に遭遇するため、特にこの項をもうけた）

体験された方式	希望する方式			
	A	B	C, D	
1	40/53 (75%)	8/53 (15%)	5/53 (10%)	
2	1/15 (7%)	10/15 (70%)	4/15 (23%)	
3	3/22 (14%)	2/22 (9%)	17/22 (77%)	
4	5/18 (28%)	8/18 (44%)	5/18 (28%)	
5	4/28 (14%)	12/28 (43%)	12/28 (43%)	

6	A + C (D)	21/51 (41%)	6/51 (12%)	24/51 (47%)
7	B + C (D)	0	4/12 (33%)	8/12 (67%)
AならびにB以下の 方式を経験した人の 支持率	4, 5, 6の 総括	30/97 (31%)	67/97 (69%)	

従来の方式と新方式を体験した人達の結果の総括から新方式は強く支持されていることが分かる。

5. 回答者の意見から

回答者の意見で主なものは次のようであった。

- 1) 新方式を円滑に実施できるように講演のグループ化に努力する。
- 2) 新方式を効果的に実施するために討論時間を長くする。
- 3) そのために休憩時間を増加することもよい。
- 4) 新方式 (B, C, D) で行なうと希望する講演を聴けないことがある。
- 5) あらかじめ座長と講演者との十分なコンセンサスを得ることが必要である。

6. ま と め

アンケートの回収率は必ずしも高くなかったが、この結果から、今春の講演大会で実施した新しい運営方式が支持されましたので、今後も座長の裁量により A, B, C, D のいずれか方法を選定し、あらかじめ講演者に連絡のうえこれを実施してゆくことといたします。

ご承知の通り、講演数は年々増加する傾向にありますが、一方では十分な講演会場の確保や講演会開催期間の延長が困難であること等の事情もありまして、一般講演の討論時間を十分とり難い状況となっておりますが、講演プログラム編成にあたり、同類講演のグループ化等に努力いたしまして、講演と討論の内容が充実できるよう、今後ともひきつづき改善をはかりたいと考えておりますので、今後ともご協力、ご支援をお願いいたしたく存じます。

また、今回のアンケートにご回答下さいました方々に厚くお礼申し上げます。

(日本鉄鋼協会編集委員会講演大会分科会主査 安 藤 卓 雄)

(協会記事 N144 ページよりつづく)

④ 破壊力学・フラクトグラフィー

神 鋼 酒井 忠迪

⑤ 炭化物などの異相の影響

東工大 中村 正久

(4) テキスト：部会報告書を使用する。

(1) E S W の化学反応とフラックスの性質

(2) E S W の物理現象

(3) E S W 溶接部の機械的性質

(4) E S W の調査と国際的規格を作る。

特 殊 製 練 部 会

第1回第5分科会 開催日：6月3日。出席者：後藤部会長、小林主査、ほか 14 名。

1. 今まで活動を停止していたが、今年度から活発に活動することになり、後藤部会長、小林主査から部会、分科会についての説明が行われた。

2. 当分科会は ESR とエレクトロスラグ溶接 (ESW) の比較に関する研究をすることになっているが、最初のうちは E S W そのものを追求していくほうがよいという意見が多く、その方向で進むことになった。

3. 物理化学を根定においた研究をしてもらいたいという要望が部会長から出された。それを受けて研究目標をつぎのように分類した。

鉄鋼科学技術史委員会

第8回委員会 開催日：5月13日。出席者：館委員長ほか 12 名。

本委員会の前に、旧東大・土木工学科の奥村敏恵氏に高抗張力鋼の歴史について、実際の使用例及び事故例などを含む特別講演を受けた。

本委員会では材料、製鋼、教育の各 W.G の活動報告があつた。

今度材料の荒木主査が東大から金材技研の所長になられたことから主査を辞退されることになった。

今後各 W.G の活動をさらに円滑にするためかねてからの懸案事項であつた W.G の幹事として製鋼、材料の W.G について依購者を決定した